

# （海外最新事情）

## 中国

### 「鶏西」を知っていますか(1)中国東北バスの旅

現代中国学部 梅田 康子

みなさんは、「鶏西」という地名を聞いたことがありますか。2005年に朝日新聞で紹介されたこの町は、これまでたびたび日本のマスコミに取り上げられています。



鶏西市は、中国最北の省である黒龍江省の東部に位置し、緯度はおおよそ稚内と同じです。省都ハルビンから約200キロ、バスで7時間ほどです（地図参照）。東はロシアと国境を接していて、興凱湖（ロシア名：ハンカ湖）という巨大な湖が国境を跨いでいます。この湖の面積は琵琶湖の6倍強、向こう岸も見えないし、海のように波を打っています。それで、観光に訪れる人も多いのですが、日本のマスコミで紹介されたのはそのことではありません。もともと炭鉱の町として有名だった鶏西市は、大勢の若者が中国各地から集まり日本語を学ぶ「日本語の町」として賑わっていたので

す。記事によると、当時は16の日本語学校で年間約6,700人が学び、「言葉を身につけるなら鶏西へ行け」と言われるほどでした。2007年にもNHKの「中国鉄道大紀行」で関口知宏が訪ねています。中国各地から日本語学習のためだけに集まった若者が、寮で生活し、朝から晩まで毎日集中的に日本語を学ぶ…。大教室で、大人数が大声で繰り返し暗唱する日本語文——。いつかこの目で見たいと思っていたのですが、ついに今夏、そのチャンスが来ました。鶏西の日本語学校の先生が、愛大大学院に留学、現在は院を修了し、研究生として



ハルビン～鶏西～鶏東の長距離バス



バスターミナルで切符を買う列



高速 SA のトイレはかわいい建物

愛大に在籍しているので、そのついでで学校見学をお願いしたのです。

今回は、他の予定との兼ね合いで、北京経由で行くことにしました。8月13日（土）中部国際空港 9：20 発の CA160 便にて北京空港へ。北京で 4 時間ほどの乗り継ぎ待ちをして、国内線でハルビン空港に 18：20 到着。市内に入ったときにはすっかり夜になっていました。この日はハルビンに宿泊し、翌日のバス移動に備えます。翌 10 時、ホテルをチェックアウトし、長距離バスターミナルへ移動。日曜だからターミナルは激混みでしたが、なんとかバスに乗りこむことができました。バスは日本のバスとそう変わらず、車内にはトイレ、DVD モニター、防犯カメラが設置されていました。同じバスに鶏西に行く新入生がいました。彼は英語コースの新入生でしたが、やはり「語学をやるなら鶏西」という評判を聞いて、入学を決めたそうです。翌週から新学年がスタートするので、ちょうどこの時期は新入生の入校ラッシュ。それでハルビンには学校の事務職員が泊まり込んで、旅館のお出迎えよろしく、各地から次々に到着する新入生を駅からバス乗り場へと案内していました。何でも広い中国。駅前だって大きいし、何かを探して歩くのは本当に疲れます。ですから、出迎えは新入生にとって心も体もホッとさせるサービスと言えるでしょう。途中 2 回の休憩をはさんで 7 時間半、ようやく鶏西に到着しました。7 時間半は長かった…座席はリクライニングできるの

ですが間隔が狭く、ただ寝るのが一番…な旅でした。（次号へ続く）

参考：朝日新聞「国境の都市に日本語ブーム」  
2005 年 10 月 6 日夕刊

## ヨーロッパ

### 欧州危機を乗り切れるか？

法学部 中尾 浩

連日大きく報道されている通り、現在、ヨーロッパは未曾有の金融危機に陥っている。ギリシャ、スペイン、ポルトガルなどで債務危機が生じ、とりわけギリシャがもはや待ったなしの状態にまでなっている。もっとも、政治や経済の専門家ではない私に現在の欧州危機について解説する能力などあるわけがない。しかし、国民性から今日の欧州危機の由来と行く末について、特にジョークを手掛かりに考えてみたい。

お読みになった方も多いと思われるが、2005 年に出版され、根強い人気を持っているジョーク本に早坂隆氏の『世界の日本人ジョーク集』（中公新書ラクレ）がある。一時期、新聞の広告欄にもよく載ったので、覚えている人もいると思うが、豪華客船が沈没しそうになって、船長が各国の男性に海に飛び込んでもらうために、各国ごとに頼み方を変えるジョークがある。早坂氏の本から引用してみよう。

アメリカ人には「飛び込めばあなたは英雄ですよ」  
イギリス人には「飛び込めばあなたは紳士ですよ」  
ドイツ人には「飛び込むのがこの船の規則になっています」

イタリア人には「飛び込むと女性にもてますよ」  
フランス人には「飛び込まないでください」

日本人には「みんな飛び込んでいますよ」（pp. 110-111）

アメリカ人と日本人を除いては、いずれも EU 加盟国ばかりである。私の貧しい海外経験からも、確かに、うなずける点が多々ある。2009 年にフランスに一年滞在した時に仲良くなった家族の母親はドイツ人であった。彼女は、車が全く来っていないが歩行者信号は赤の横断歩道で、周りのフランス人がどんどん「信号無視」をしていても、「規則を守らなければいけません」と決して渡らなかった。そして、「日本人も規則を守る国民なんでしょう？」と言われた時には、かなりフランス人化していたつもり私は、本当は車が来ていないんだから渡りたかったが、ドイツ人の友人に合わせてしまう、という、まことに日本人らしい行動を取ってしまった。



オルレアンのカテドラル

ギリシャというと皆さんはどんな国だと想像するだろうか。残念ながら私はギリシャはまだ訪れたことがないのだが、ソクラテスやプラトンを生んだ国だから、哲学、学問好きといったイメージをなんとなく抱いていた。しかし、実際にはなかなかユニークな国民性のようで、残念ながらここには書けないようなジョークが多い。早い話が、

ジョークの対象としては、哲学だの学問だのとは正反対の国民だと認識されているようだ。ギリシャが通貨統合に加わるときにもドイツなどはギリシャの財政政策がルーズであると指摘していたが、逆にギリシャの加入に寛容的だったのがフランスだった。

そのようなお互いに、まったく異なった価値観や国民性を持ったヨーロッパ諸国が政治、経済を統合して、これからの社会を乗り切ろうという大実験に着手したことがまずもって恐るべきことであって、不協和音が聞こえてきても当然である。むしろ、ユーロ政策もよく10年もたったものだとさえ思える。

しかし、おそらく今日の未曾有の金融危機を乗り切る原動力になるのもこの国民性の違いではなかろうか。石橋をたたいても渡らない慎重居士のイギリス、何事にも厳密なドイツ、どんなときにも希望を失わないイタリア、常に懐疑的な視点を忘れないフランスなど、こうした様々な特徴を持った国民によって検討されつくしてこそ、解決の道は見えてくるのではないか。

具体的・個別的には複数の対策をたばねた包括策を実施するしかない。有効と思われる政策のいくつかを組み合わせ、少しずつ立て直していくしかないだろう。その時にこそ、EU の精神である多様性が発揮されるべきである。

今回の欧州危機は様々な国民や民族が様々な視点から様々な意見を検討し尽くして難問解決に挑む大手術であるとも言える。